

## 終助詞「ね」と「よ」の役割に関する考察

長谷川 澄

『国語学』の1994年の年末の総記によると、1993-94年に飛躍的に研究の進んだ日本語研究の分野の1つは、終助詞、特にその中の「ね」と「よ」の研究であるということだが、私も自分の修士論文の中で、終助詞の「ね」が省略された主語を復元する要素の一つであることを書いて以来、日本語学習者のこの助詞の修得に非常に興味を持ってきたので、この辺で、手に入る限りの最新の研究を勉強してまとめ、同時に自分自身の見解もはっきりさせておこうと思ったのがこの発表である。考察の対象とした先行研究は、1986年から93年までの『日本語学』と『日本語教育』の「ね」と「よ」に関する論文5つと、単行本の『情報のなわばり理論』と『モダリティの文法』の終助詞に関する章、それに国際大学のワークペーパーから1つで、全部で8つの論文である。

## 1. 終助詞「ね」と「よ」に関する最近の研究とその問題点

終助詞「ね」と「よ」の機能の研究というのは、非常に最近になってはじまったと言ってもいいと思う。伝統的な国語学にも、勿論、現代語の終助詞の研究はあるが（例えば田中章夫、1977）、「ね」と「よ」に関しては、構文上の問題（終助詞か間接助詞か）や、どのような文体、場面で現われるか等の用法の問題について書かれていても、それが文の中でどんな機能をはたしているかという綿密な分析は見つけれない。これは、伝統的な国語学が話し言葉の研究にあまり重きをおいてこなかったことと関係があるのかもしれない。外国語としての日本語教育の立場からは、1972年に上野田鶴子が『日本語教育』に「終助詞とその周辺」という論文を発表し、『終助詞には話し手の判断を主張する「ヨのグループ」と聞き手に判断を委ねる「ネのグループ」がある』と言っている。この論文の中で上野はまた、「ジョンがいくよ」と「すぐ行けよ」という文を例にして、『はじめの文はヨがつくことで表現が強くなっているが、後の文ではヨがつくことが表現を柔らかくしている』と言っている。この二つの文についての上野の観察は確かにその通りであるとは思いますが、そうすると「よ」の機能は何か、『話し手の判断を主張する』と言ってよいのかという疑問が出てくる。

その後、しばらくは「ね」と「よ」の機能に関する研究の発表を見つけることができないが、1986年の『日本語学』に大曾美恵子が「今日はいいい天気ですね」「はい、そうです」という学生の誤用分析についての論文を出した後、この分野の研究は活発になった。大曾はこの中で『ネは話し手が聞き手と同じインフォメーションを持っている、同じ判断をしているということを確認め合う終助詞』であり、『ヨは反対に話し手と聞き手の判断や情報のくい違いを前提としている』と、「アメリカ人はあまり働きませんね」「いいえ、よく働きますよ」という文を例にして言っている。1987年には、やはり『日本語学』に陳常好が「終助詞」という終助詞全般の研究論文を出している。その中のネとヨのところで、『ヨは聞き手がまだ認識していない情報を話し手が伝える必要ありと判断して言う文につける終助詞』であると、「あんたはえらいよ」と「帰ってもいいよ」という文を例にあげて言っている。ネについては『話し手が聞き手の認識に頼って自分の認識を確認するものである』と規定しているが、その中で、「あの時はさすがに俺も慌てたね」という文を出して、

『このような認識が完全に話し手の方にある文に使うネに関して自分はまだ確信の持てる分析に至っていない』ということを書いている。この文に関しては後に触れるが、とにかくこのような「ね」があること、それを落としている論文が多いことは大事なことである。

1989年に大修館から出版された神尾昭雄の『情報のなわぼり理論』は情報のなわぼりという見方から終助詞の「ね」と英語の you know を比較研究している章があるが、そこで神尾は、『ネは話し手の聞き手に対する「協応的態度」を表わす終助詞である。「協応的態度」とは、与えられた情報に関して、話し手が聞き手に同一の認識を持つことを求める態度である』と規定している。また、必須の「ね」と、「ね」や「よ」を伴えない文については、「妹さん、おめでただそうですね」「そうです」という文などを例にして、『話し手と聞き手が同一の情報を持っていることが想定されれば、ネを伴わなければいけないし、発話の情報が聞き手よりも話し手のなわぼりに属す内容には、ネをつけることはできない』という注をつけている。この例文に関して言えば、これが神尾の言う『聞き手に同一の認識を持つことを求める態度』の文と言えるのかという疑問がある。神尾はまた任意のネについて、「これ、おいくらですか？」と言う問に対する「600円です」と「600円ですね」を挙げ、「600円ですね」の方は『聞き手が同一の認識を持っていないにも関わらず持っているかのように想定することで連帯感を表現し、丁寧さを加えている』と説明している。これも、連帯感を示すことが丁寧になるとは思えないし、「600円ですね」の方が「600円です」より丁寧とも思えないが、この例については後に触れることにする。

その後、1991年にくろしお出版から出た益岡隆志の『モダリティの文法』には「終助詞ネとヨの機能」という章があるが、それには『ヨとネの機能には聞き手の知識にたいする話し手の考慮が深く関わっている』として、『自分が有する知識や意向の在り方が聞き手の知識や意向と一致する方向にあると判断した場合にはネ、対立すると判断した場合にはヨ』と言っている。そして、命令文に「よ」がつくと表現が弱くなることについて、『聞き手に行為を要求する際に聞き手の意向には反しているという配慮がなされているからである』という。しかし、1992年の『日本語教育』で、白川博之が、「あの先生、いい先生だよね」という文を例に、『ネとヨはしばしば共起し得るのだから、この二つを対立する機能を持つものと見なすのは、ここで決定的な矛盾をきたす』という重要な指摘をおこなっている。白川はこの論文の中で、ヨの機能を『ヨはそれが付加された文の発話が聞き手に向けられていることをことさらに表明する』と規定している。そして、命令文にヨがついた場合については、『イントネーションによっては必ずしも表現を弱めはしない』と言った上で、『ヨによってどんな意味が加わるのかは詳しい検討が必要』としている。白川はまた、『「よね」という文末表現の存在が先行研究の分析では説明できない旨指摘したが、本論文でも、この形式の意味を説明するところまでは至らなかった』と書いている。私は白川の「よ」の機能の規定に根本的に賛成であるが、そこから発展させて、命令文につく「よ」も、「ね」と共に用いられる「よね」も説明することが可能であると思っている。しかし、それについては後に述べる。

『日本語教育』には、この後、もう一つ1993年に伊豆原英子が「ネとヨの再考」と題する論文を発表している。伊豆原の見方は『ネのコミュニケーション機能には持ちかけ、共有化、同意、確認などがあり、ヨは聞き手の気持ちに関わりなく、一方的に話を押し進めて行く持ちかけである』とし、『二つの違いは話し手が聞き手をどのようにとらえているかという「聞き手の取り込み度」の違いでもある』と言う。つまり、『ヨの場合、聞き手は単に聞き手であるが、ネがつくと聞き手は

発話の中に組み込まれた聞き手となる』と言う。伊豆原は『ヨネがあって、ネヨがないのは、ネとヨの聞き手の取り込み度に階層的な違いがあるからであろう』と言うが、この説明に説得力はない。はじめは単なる聞き手として捉え、続けてすぐ、発話の中に取り込んだと言うのだろうか。同じ年の『言語』に金水敏は「あなたのお名前は」「中村太郎です」「お勤めして何年目ですか」「もう20年になりますね」「お子さんの年齢は」「もうすぐ12ですね」と言う例をあげ、『話し手の個人情報の中でも、殆ど検索、計算などなしに引き出せる情報にはネがつかないが、答えるのに何等かの検索が必要な情報にはネが自然につくこと』からネの機能を『当該の発話を、マッチする特定の文脈とリンクするためのものである』と規定し、『リンクとは、自分自身で計算するというような過程でもいいし、聞き手に確かめるという過程でもいい』としている。ヨについては『当該の発話を関与的なものとして登録する機能』とし、『関与するのは聞き手でも有り得るし、ヨネの場合は聞き手に確認するのであるから、むしろ話し手にとって関与的な例である』と言っている。今回、考察の対象にした論文には、この他にも一つ、国際大学のワークペーパーがあるが、それは日本語学習者のこの二つの助詞の運用に関する問題なので、後で触れることにする。

ここまでの所で私が問題と考える点を指摘し、その後、私自身の「ね」と「よ」の観察の方法とそれから導かれた見解とを書く。まず、問題点は、白川の指摘の通り、「ね」と「よ」が共起する以上、この二つを対立した機能を持つものと言う分析は成り立たないと思う。また、陳の問題とした文「あの時はさすがに俺も慌てたね」から見て、「ね」が聞き手側の、または聞き手が既に知っている情報、見解であると言う情報のありかの問題とする見方もなりたないと思う。しかし、最後の金水の『ネは当該文を他の文脈にリンクするものであって、聞き手との関わりを必ずしも必要としない』という見方は、「ね」が聞き手のない独白文のようなものに使えないことから説得力がない。たとえば、金水の例文と全く同じ文を日記に使うとして、「数えてみれば私も、今の会社に勤めて20年になりますね」という文は明らかに不自然である。「よ」も聞き手のない文には特別の意図でもない限り現れないだろう。と言うことは、「ね」や「よ」の機能は、やはり何らかの聞き手との関わりを示すことにあるのであろう。例えば、『情報のなわばり理論』にあった例の「これ、おいくらですか」「600円です(ね)」は、全く同じ状況でどちらでもいいわけではなく、店員がすぐに確信をもって答えられる時には「ね」は普通付かないのではないかと。店員が値段を調べたり、探したりして答える時に、「ね」が付けられるのではないだろうか。これは、「自分も今、値段が分かった。我々はいっしょに情報を得た。あなたも私が調べるのを見ていたであろう」と言う聞き手との共通の立場、共感を示したものと思う。陳の例で考えれば、「あの時は、さすがに俺も慌てたね」の話し手は、聞き手にどんな答えを期待しているのだろうか。「それはそうでしょうね。誰だってそんな時には慌てますよ」と言うような同意を期待しているのではないだろうか。そうすれば、金水の「もう、20年になりますね」や「もう直ぐ12になりますね」も、もう20年にもなるのだ、はや12歳になるのだという感慨を聞き手にも分け持ってもらいたいかなとそうでなければ、あなたに質問されるまで、あらためて考えもしなかったけれど、そういわれて数えてみればこうなるという、相手とこの情報を分かち合いたいという気持ちの現われなのではあるまいか。一方、「よ」に関して問題を言えば命令につく「よ」に明解な説明がないことがある。白川の「発話がことさらに相手に向かって示す」も金水の「関与的であることのマーカー」であるという説も、命令文以上に相手に向かって示す文、関与的である文はないはずだから、そこに「よ」が付けばよほど強

い命令になりそうなものであるが、弱くなるという観察があっても、強くなるというものがないことを考えるとこの説明は明らかに不備で、何か他の機能があるはずである。このような問題意識を持って、テレビドラマの「青春家族」の会話にでてくる「ね」と「よ」と「よね」を全て抜き出して、考察したのが以下の結果である。

## 2. テレビドラマ「青春家族」の中に出てくる「ね」と「よ」と「よね」

### 2-1. 「ね」

「青春家族」で「ね」が使われている発話の意図は三つのグループに大きく分けることができる。

(1) 話し手と聞き手が共有している情報、状況について、聞き手の同意を求めるもの。

(例) 「麻子さん遅いですね」

「大安って言うと混むんだね。どこでも」

「何だかへんな家族旅行になっちゃったね」

(2) 聞き手の情報、状況について、話し手が確認したり、理解や同意を表明しようとするもの。

(例) 「大変ですね」

「東京の阿川さんでいらっしゃいますね」「よくわかりましたね」

「ずいぶん（あなたは）正直なんですね」

「（おまえは）口の減らないやつだね。全く」

その他、頻繁に現われる「そうね」、「そうだね」

(3) 話し手の情報、状況、意見に聞き手を引き込んで、同意や理解を求めたり、ダメ押しをするもの。

(例) 「さみしいわねえ」

「私も顔見に行きたいけど、遠慮しといた方がいいわね」

「分からないけど、何年単位ってことは確からしいのね」

「そんなこと、ごめんだね」

「だけど、今さらそれ言われたってね」

勿論、この三つのグループの分類は大まかなもので、例えば(2)に分類した「よくわかりましたね」や「ずいぶん正直なんですね」も自分の意見に同意を求めているとも言えるから(3)との判別は難しいが、しかし、「ね」が聞き手に係わることに、話し手だけに係わることに、両者に係わることに現われることは、はっきりわかると思う。また、“必須のネ”についても普通言われている“聞き手が既に知っている（と思われる）情報にはネを付けなければいけない”と言う規定は(3)のグループの例の「私も行きたいけど、遠慮しといた方がいいわね」のような、話し手が既に知っている情報とは言いにくい、話し手の意見でも必須の場合があることから修正の余地があるのではないかと考える。以上のところから、三つのグループの発話の意図に共通するものを探して、「ね」の役割を考えると“発話の内容について、話し手が聞き手に同意や理解や確認を求めたり、話し手自身の同意や理解を表明するもの”と言えるのではないかと。必須の「ね」に関しては、

今回、発表の時間が無かったが、発話の意図が同意や理解や確認の要求や表明だけにある時、必須となるのではないかと考えているが、それについては次の機会に詳しく述べたい。

## 2-2. 「よ」

「青春家族」の中に「よ」は以下のように非常に頻繁に現れる。

- (例) 「この期におよんで、お前、馬鹿なこと言ってるんじゃないよ」  
「俺だって泣きたいよ」  
「まだ夢は捨ててませんよ」

しかし、これらの例で「よ」がその発話にどのような意味を加えているのかを探るのは非常に難しいし、主観的な判断になる恐れがある。そこで、「よ」が必須かそれに近いと思われる例を抜き出して、「よ」が付かない場合との文意の相違から「よ」の働きを考えてみた。

- (例) (母親の「ぜいたく言わないの。(あなたは弟子で) 仕事させていただいてるんでしょ」という意見に対して) 「だって、させていただいてるのは、他の人もよ」  
「今は老後をスペインとかオーストラリアでって時代よ」  
(飲みすぎた息子に) 「ちょっと今夜はいつもよりすぎたわよ」

このように見ていくと、一番はじめの例は「式が始まる」という叙述、或いは陳述の文を「だから中に入ったほうがいい」という聞き手に対する主張の理由として示す文に変えているし、次の二つの例はいずれも未完成の陳述文を話し手の主張の裏付けになる事実として聞き手に差し示す文にしている。最後の例は、「よ」をとってしまえば、飲み過ぎたのは話し手自身になり、「よ」を付けることによって「これは、あなたに対するメッセージである」ということを示し、飲み過ぎた動作主をも変えるという大事な役をしている。「よ」はつまり、白川(1992)の言う“発話が聞き手に向けられていることをことさらに指し示す”をもう一歩進めて、本来、聞き手に対するメッセージではない叙述や、陳述の文をもメッセージに変える働き、つまり、「メッセージ化の働き」があると言えるのではないだろうか。こう考えれば以下の例のような命令文につく「よ」が多くの場合、表現を柔らかくする働きを持つのも当然である。直接的な命令をメッセージに変えているのであるから。

- (例) 「入るなよ」  
「いいかげんにしろよ」  
「待てよ」

## 2-3. 「よね」

2-1.、2-2.のように「ね」と「よ」の機能を規定してみると、その両方がいっしょに使われている場合も無理なく説明できると思う。以下に「青春家族」の中の「よね」の例をあげ、それによって付け加えられた意味を分析してみたい。

- (例) 「(あなた)他に好きな人なんていないわよね」

「お父さん、なんか怒鳴ってたよね」  
「学校変わるって、それだけでエネルギー使わせちゃうのよね」  
「思い切って（したのは）正解よね」

はじめの例は「よね」の他に「わ」も付いて、終助詞が三つという文であるが、「あなたは私の他に好きな人などいない」という話し手の意見（わ）を聞き手へのメッセージとして指し示し、それについての同意または確認を迫る形になっている。「よね」はここでは「私はこう思っているのだぞ、それでいいのだな」という凄味をくわえている。「よ」、「ね」のどちらを抜いてもこの凄味は出ない。二番目は叙述文を聞き手へのメッセージとしてから「あなたも聞いたであろう」と確認しているのであるし、次の二つは話し手の見解を「よ」でメッセージとして示してから「ね」で同意を求めているのである。

ここまでが「ね」、「よ」、「よね」に対する私の見解であるが、最後に国際大学のワークペーパーで木村静子が指摘している日本語学習者の「ね」の過剰使用の問題にふれておきたい。木村は“殊に「そうですね」は「そうです」と「ね」の組み合わせさったものというより「そうですね」という一つのかたまりとして考えられているようである。それ故「そうですか」と言うべきところも「そうですね」という過剰使用が起こる”と書いているが、これは確かに現場の教師ならではの指摘である。私も教室で、学生の誤用例の説明などをした後で、当の本人から「そうですね」という返事をもって気の抜ける思いをしたことがある。「そうです」：相手の発言に対して正誤の判断を求められた場合に「正しい」の意味で。または相手の発言に積極的な賛意を表明したいとき「そうですよ」の同義として。「そうですよ」：相手の発言に積極的な賛意を表明する時。「そうですね」：相手の発言に自分も同意である旨を表明する時。「そうですか」：相手の発言によって新しい情報を得た旨を表明したい時。私は現在までのところ、以上のように判断している。そして、大曾、神尾、その他に“自分の側に属する情報に「そうですね」は使えない”という指摘もあるが、私はそれよりも、相手が聞き手の側に属する情報を言う場合は、その情報について正誤の確認を求めている場合が多いから「そうですね」が使えないことが多いのだと考える。例えば「お仕事、面白そうですね」「そうですね。面白いほうでしょうね」などという場合には“自分の側に属する情報”ではないとは言にくいからである。頻繁に使われる「そうです」、「そうですよ」、「そうですね」、「そうですか」についてさえ学習者に正しく習得させるには多くの論議を重ねなければならないようだ。多くの方の御意見を伺いたい。

(マギル大学)

#### 参考文献

- 伊豆原英子 1993 「『ね』と『よ』再考」『日本語教育』80  
上野田鶴子 1972 「終助詞とその周辺」『日本語教育』17  
大曾美恵子 1986 「『今日はいいい天気ですね』『はい、そうです』」『日本語学』5  
神尾昭雄 1989 『情報のなわ張り理論と日本語の特徴』(2.5「ね」の性質) 大修館  
木村静子 1993 「日本語学習者の『ね』の習得に関する一考察」『国際大学ワーキングペーパー』

Vol. 4

- 金水敏 1993 「終助詞ヨ、ネ」『言語』Vol.22, No.4  
白川博之 1992 「終助詞『よ』の機能」『日本語教育』77  
田中章夫 1977 「助詞（3）」『岩波講座日本語』7  
陳常好 1987 「終助詞」『日本語学』6  
益岡隆志 1991 『モダリティの文法』（第二章終助詞「ね」と「よ」の機能）くろしお出版